



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	ナラウアス : 最初の「ヌミディア人」
Author(s)	栗田, 伸子
Citation	東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学, 54: 19-27
Issue Date	2003-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/13945
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

ナラウアス ——最初の「ヌミディア人」——*

栗田伸子

歴史学**

(2002年8月30日受理)

はじめに

フロベールの小説『サランボオ』(1862年)の読者なら、登場人物の中に女主人公であるアミルカアル(ハミルカル=バルカ)の娘サランボオの許婚者^{いいなずけ}で、従って主人公マトオから見れば恋敵となるヌミディア(ヌミディア)人ナラヴァスなる青年がいたことを記憶されているかもしれない。この「青年」は実在の人物で、フロベールが『サランボオ』執筆に際して参考にしたと思われる古代ギリシア人の歴史家ポリュピオスの著作にその名が記されている(ギリシア語としての正確な発音は Ναραύας, ナラウアスである)⁽¹⁾。

小説の背景となっている歴史的事件は、紀元前241～238/7年にカルタゴの北アフリカにおける領土を中心起こったいわゆる傭兵戦争、別名リビア戦争とも呼ばれる事件である⁽²⁾。周知の如くカルタゴ軍の主力は市民軍ではなくて地中海周辺各地出身の外国人傭兵であったが、これと並んでカルタゴ軍の重要な構成要素であったのは、カルタゴに従属していた北アフリカの先住民であるいわゆる「リビア人」(ポリュピオス等のギリシア語史料にいう Λιβύες, リビュエス。「アフリカ人」と訳しても良いかもしれない)であった⁽³⁾。リビア兵は戦争終結時に給与の支払いを受けて除隊するのが普通である点で⁽⁴⁾、傭兵(οἱ μισθοφόροι)の一種とも言えるが、ペロポネソス戦争後のギリシアの傭兵のような典型的傭兵とは異なり、自発的応募ではなくカルタゴ国家による何らかの政治的・社会的強制によりカルタゴ軍兵士となるのだと思われるので、彼らの従軍はそれ自体リビア人社会にとっての負荷であり、

カルタゴへの従属のしるしであったとみることができ。第一次ポエニ戦争でローマに敗れたカルタゴは、前241年、これら外国人傭兵およびリビア兵等から成る軍隊を主戦場であったシチリアからカルタゴ本国へ引き揚げるが、戦争による疲弊に加えてローマへの賠償金支払いにより国庫は涸渇しており、兵士への給与支払いと軍の解散を円滑に行なうことができなかった。この混乱の中で、傭兵の一人であるローマからの逃亡奴隷でカンパニア人のスペンディオスと、自由人でリビア人のマトース(フロベールの「マトオ」)の教唆により始まったとされるのがこの「傭兵戦争」であり⁽⁵⁾、以後、カルタゴの将軍ハミルカル=バルカ(ハンニバルの父)によって鎮圧(前238/7年)されるまで、4年以上にわたって続いた。すなわちこれは現存史料によって知られる限り最大の対カルタゴ反乱であり、しかもカルタゴ軍中の傭兵・リビア兵だけでなく、リビア人都市、リビュ=フェニキア人(フェニキア化されたリビア人、ないしはカルタゴ人以外の「在アフリカ」フェニキア人)都市の多くも参加しており、その意味で単なる傭兵反乱ではなく、アフリカのカルタゴ領全土に拡がる、まさしくリビア(アフリカ)戦争と呼ばれ得るような様相を呈した。

ポリュピオスにより「ノマス」(Νομάς, ノマデスの単数形)であると説明されるナラウアスは⁽⁶⁾、この戦争中にハミルカル=バルカに感銘を受けて仲間のノマデスと共にハミルカルの陣に投じ、カルタゴへの忠誠の対価としてハミルカルの娘との結婚を約束され、この後、傭兵・リビア軍との戦いに協力して大功を挙げたという⁽⁷⁾。以下、本稿では、ポリュピオスの「傭兵戦争」叙述におけるナラウアスの位置づけを他の古

* Naravas: a Prototypical Numidian Prince (Nobuko KURITA)

** 東京学芸大学(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

典史料との比較と関連の中で明らかにし、更にこの問題に関する近年の貨幣学上の知見を検討することによって、ポエニ戦争期——カルタゴ時代末期——の北アフリカ社会の歴史の一端を探ろうとする。

1. ポリュビオスにおけるナラウアスと「ノマデス」

研究史上、ナラウアスは「ヌミディア人」であるとされ⁽⁸⁾、この前提が疑われることは少ない。ギリシア語の「ノマデス」(Νομάδες)は「遊牧民」を意味する普通名詞(英語の nomads)でもあるが、自ら第三次ポエニ戦争に参加し、ポエニ戦争期の地中海世界史を主要テーマとしたポリュビオスの著作『歴史』の中の「傭兵戦争」等に関する叙述においては、遊牧民(ないし流浪生活者)一般というより、北アフリカに住む、しかもリビア人(リビュエス)とは区別される何らかの集団を指しているように見え、つまり一種の固有名詞として使われているように見える⁽⁹⁾。ポリュビオスを主要史料の一つとして書かれたローマ人の歴史家リウィウスの『ローマ市建設以来の歴史』等のラテン語の文献では、平行記事の「ノマデス」に相当する部分が「ヌミダエ」(Numidae)、つまりヌミディア人と表記され⁽¹⁰⁾、この場合は明らかに一つの民族ないし種族名を示す固有名詞となっている。それ故、これらのギリシア・ローマ古典文献研究の総合の上に立つ近代の西洋古典学・古代史学では「ノマデス=ヌミダエ(という種族名)」との了解が一般的であり、例えばフロベールもこのような了解の下に「リビア人」マトオと「ヌミディア人」ナラヴァスの造形を行なっていると思われる。しかし、事はそう簡単ではない。

なぜなら、「リビュエス」「ノマデス」「ヌミダエ」は上述の如くすべてギリシア語ないしラテン語であり、カルタゴの言語(フェニキア語、「ポエニ語」)でも、当該先住民諸集団自身の言語でもなく⁽¹¹⁾、従って「リビア人」と「ノマデス(ないしヌミディア人)」の区別は何ら自明のものではない。実際、言語学的には「リビア人」も「ヌミディア人」も、またより西に住む「マウレタニア人」も現存のベルベル諸語と近縁とされる同一の言語を話したと考えられており、この言語が「リビア語」(le libyque)と呼ばれている⁽¹²⁾。また、第二次ポエニ戦争期以降ローマと同盟してカルタゴを滅亡へと導いた王マシニッサ(Massinissa 或いは Masinissa)らのいわゆる「ヌミディア王」(rex Numidarum, rex Numidiae)、彼らの統治する「ヌミディア王国」(regnum Numidiae)も、ラテン語の史料の中でこう呼ばれるだけであり⁽¹³⁾、ヌミディア王権や

先住民自身の史料——王権の公用語とされるポエニ語やリビア語の碑文等——では単に「王」(ポエニ語の HMMLKT, リビア語の GLDT) 何某⁽¹⁴⁾、或いは「マッシュリヤー(人)の王」(マシニッサの子ミキプサの葬送碑文⁽¹⁵⁾)という表現しかみられない。従って「リビア人」と「ノマデス(ヌミディア人)」という区分は、カルタゴ時代の北アフリカ先住民社会に本来存在した種族的区分をギリシア語(ないしラテン語)に単純に移し換えたものというよりは、むしろポエニ戦争期における従来のカルタゴ支配の動揺、ギリシア・ローマ世界とカルタゴ領北アフリカとの本格的遭遇の中で生み出された新たな認識枠組、新たな範疇である可能性を想定する必要がある⁽¹⁶⁾。

このような観点から史料を再検討する時、この前241~238/7年の戦争の呼称に関するポリュビオスの二箇所の記述が、新しい意味を帯びて来る。先に注(2)で見たように、ポリュビオスはI, 65, 3でこの戦争について初めて言及するにあたって、「傭兵達とノマデスと反乱に参加したりビュエスに対する戦争」と述べる。以下、彼は戦争勃発に至る経緯を説明し、その叙述は、I, 70, 6まで続く。そしてこの部分の締めくくりにあたるI, 70, 7において「この、傭兵達に対する、普通リビア戦争の名で呼ばれている戦争はこのような原因でこのようにして始まった(ὁ μὲν οὖν πρὸς τοὺς ξένους καὶ Λιβυκὸς ἐπικληθεὶς πόλεμος διὰ ταῦτα καὶ τοιαύτην ἔλαβε τὴν ἀρχήν)」と記す。二つの記述を比較検討すると、執筆当時(前2世紀中葉)この戦争は一般には「リビアの(Λιβυκὸς)」戦争の名で通っていたが、ポリュビオス自身はこれをむしろ「傭兵達に対する(πρὸς τοὺς ξένους)」戦争と呼び、更に、最初に言及するにあたっては「傭兵達とノマデスと反乱に参加したりビュエスに対する戦争」と規定していて、この最初の呼称がおそらくポリュビオスにとっての最も厳密な言い方であるのだと思われる⁽¹⁷⁾。「ノマデス」が傭兵やリビア人と並んで対カルタゴ戦争の主体の一つに数えられていることが注意をひく。ちなみにポリュビオスの『歴史』における「ノマデス」に関する最初のまとまった記述は、I, 31, 2にみられ⁽¹⁸⁾、ここでは第一次ポエニ戦争中のローマのアティリウス=レグルスによるアフリカ侵攻(前256~255年)と同じ頃、ノマデスもまたカルタゴを攻撃し、その田園部(τὴν χώραν)にローマ軍にまさるとも劣らぬ被害を与えたことが記されている。

「傭兵戦争」に関する記述の中では、ウティカ市付近での攻防におけるカルタゴの将ハンノの交戦相手として「ノマデスとリビュエス」が登場(I, 74, 7)

した後、ヒッパクリタエ（ヒッパー・アクラ）市攻囲中の傭兵・リビア軍の将マトースが、「ノマデスとリビュエスに使いを送り、彼を救援しに来るように、そして自由のための好機（*τοὺς ὑπὲρ τῆς ἐλευθερίας καιρούς*）を逃さないように請うた（I, 77, 3）」と述べられる。リビア人と同じく、これらのノマデスも従来何らかの形でカルタゴの「支配下」にあったであろうことが、ここから読みとれる⁽¹⁹⁾。この直後、この付近で戦闘中の傭兵軍の将スベンディオスの軍に「ノマデスとリビュエスの援軍」が加わり、ハミルカル＝バルカ指揮下のカルタゴ軍を、リビュエスが正面から、ノマデスが背後から、スベンディオス軍が側面から攻撃する（I, 77, 6－7）状況下で、カルタゴ側は完全な窮地に陥った。これを救ったのが、先に述べた「ノマス」ナラウアスのハミルカルへの帰順と協力であり（I, 78, 1－9）、ハミルカルは、二千のノマデスを率いるナラウアスの助けを得て、スベンディオスとアウタリトス（ガリア人傭兵の長）の軍を破り、一万人を殺し四千人を捕えた（I, 78, 9－12）。この記述においてポリュビオスはこの勝利に対するナラウアスの寄与について「戦いは…ハミルカルの勝利に終わった。象達の善戦とナラウアスの働きによって、（*δὲ τοῦ Ναραύα παρασχομένου χρείαν*）」と特筆している（I, 78, 11）。この後もハミルカルは、傭兵軍のカルタゴ市包囲の際、田園を巡察してマトースとスベンディオスの軍の補給を妨害するにあたって「この事や他のすべての事においてノマスであるナラウアスの最大の奉仕を受け（*μεγίστην αὐτῷ παρεχομένου χρείαν περί τε ταῦτα καὶ τάλλα Ναραύα τοῦ Νομάδος*）I, 82, 13」たとされ、更に傭兵軍が「象達とナラウアスの騎兵を恐れて（*καταπεπληγμένοι τὰ θηρία καὶ τοὺς περὶ τὸν Ναραύαν ἱππεῖς*）」、ハミルカル軍と平原で戦うことを避けた（I, 84, 4）とも記されている。以上のようにポリュビオスの「傭兵戦争」の記述は全体として、当初傭兵側の構成要素の一つとしてノマデスが重要な役割を果たしていたことを指摘すると共に、ノマデスの一部がナラウアスに率いられてカルタゴ側に加わったことが、カルタゴによる「傭兵戦争」鎮圧への道を拓く一つの転機となったとみなし得るような筋立てとなっているのである。

それでは、ポリュビオスによってその役割を強調されているナラウアスなる人物、ならびに彼が属していたノマデスという集団は一体いかなる存在であったのだろうか。

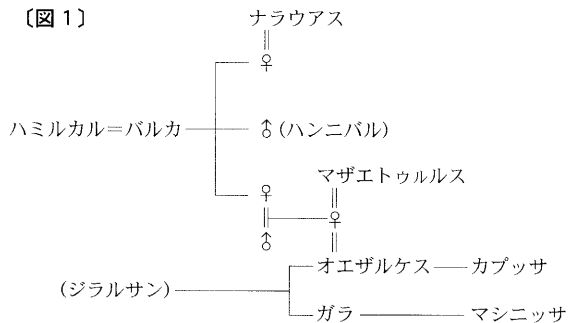
2. カルタゴとノマデス

まず、ポリュビオスが叙述するナラウアスのカルタゴ軍への帰順の場面を少し詳しく読み直してみると、ナラウアスとカルタゴとの関係はこの時点で初めて生じたのではないことがわかる。彼は高貴な身分のノマスであり、軍人精神に溢れており、「父祖以来の絆^{きずな}があるので常にカルタゴ人に対して友好的であった（*οὗτος ἀεὶ μὲν οἰκέως διέκειτο πρὸς τοὺς Καρχηδονίους, πατρικὴν ἔχων σύστασιν.*）」（I, 78, 1）が、今こそハミルカル＝バルカと会見して自己紹介する好機とみて、約百人のノマデスと共にカルタゴ軍の陣に近づいて来、恐れる様子もなく手で合図し、将軍との会見を申し入れ、馬と槍を従者に預けて丸腰で大胆に陣地に入ってきた（I, 78, 2－6）のである。ハミルカルとの面談を許されると、ナラウアスは、自分は全カルタゴ人と良くありたいが特にバルカの友情を求めているのだと語って、全ての行動と作戦における助力を申し出る。ハミルカルはこれを聞いて、この青年が自分に会いに来た勇氣と面談における率直さとに動かされ、単に助力を受け入れたのみならず、カルタゴに忠実であり続けたら娘を与えるとまで誓った（I, 78, 7－9）。

以上の記述からは、ノマデス一般が傭兵側に立ってカルタゴ軍と戦っていた状況下で、ナラウアスの一族は父祖（あるいは父）の代からのカルタゴとの友好関係を保っており、前章で説明したカルタゴ軍の危機において⁽²⁰⁾、自らの協力をハミルカル＝バルカに改めて高く売りつける機会をつかんだことが読み取れる（——フロベールの描くナラヴァスが最初は傭兵軍に参加していたのとは少し違う——）。ナラウアスに娘を与えるというハミルカルの行為⁽²¹⁾は、バルカ家とナラウアス一族との政略結婚であるが、これもまた、この時が初めてではなく父祖の代からあり得た（バルカ家とではなくとも他のカルタゴの名門との間に）とも考えられる。ヌミディア人やマウレタニア人（マウリー）の間での政略結婚については、前2世紀末の事例に関して、ローマの歴史家サルスティウスが、彼らは一夫多妻であるが故に政略結婚にそれ程の意味はない旨述べているが⁽²²⁾、他方、最近の研究ではカルタゴ人の社会では父系と並んで母系の出自も重視されたことがわかっている⁽²³⁾。カルタゴ人ハミルカルの側から見れば、娘とナラウアスの結婚は単なる報酬ではなく、ナラウアスの子供達を「カルタゴ化」ないし「バルカ化」することによって一層強くカルタゴに結びつける意図に基づいていたとも考えられよう。

ナラウアスの一族とカルタゴとの間の世襲的な友好関係の存在からただちに連想されるのは、ヌミディア王マシニッサの父祖の一族——マッシュリー(Massylii)王家——とカルタゴとの間の類似した関係の例である。リウィウスによれば、マシニッサの父である王ガラ(Gala. 他の史料では Gaia)の死後、ヌミダエ(ヌミディア人)であるマエスリー人の「氏族」(gens Maesuliorum. Massylii と同じ種族をさす)の王位はガラの弟オエザルケス(Oezalces)に移ったが、この人物も間もなく(高齢のため)死ぬと、王家の遠縁のマザエトゥルルス(Mazaetullus)がオエザルケスの長男カプッサ(Capussa)を戦闘で倒してマエスリー「氏族」全体を服属させた。しかしマザエトゥルルスは王位を王族の少年ラクマゼス(Lacumazes)に譲って自らは王の後見役になると共に、王オエザルケスの妻であったカルタゴの貴婦人(Carthaginiensem nobilem feminam)と結婚した。この婦人はハンニバルの姉妹の娘であり、マザエトゥルルスは「カルタゴとの同盟を希望してこの婚姻を行なった(matrimonio sibi iungit spe Carthaginiensium societatis,)」のだという⁽²⁴⁾。

この例は、ヌミダエ(ギリシア語のノマデス)の一集団の支配層がカルタゴの名門の娘との婚姻によってカルタゴと結びつこうとした例としてナラウアスの場合と重なるだけでなく、妻となったカルタゴ婦人がハミルカル=バルカの孫娘であるという点で、もっと直接的にナラウアスに関係がある。すなわちバルカ家の娘達を媒介としてナラウアスとマシニッサは図1のような姻戚関係にあるわけである。



ここから更に、ナラウアスもマッシュリー(マエスリー)王族なのではないかと論を進めることも可能であり、例えばH. R. バルドゥスはG. シャルル=ピカールに依りつつナラウアスをマシニッサのおじの一人と推測している⁽²⁵⁾。この論の根拠は、J.-G. フェブリエによって紹介されたポエニ語の碑文⁽²⁶⁾にみられるガイア(ガラ)の兄弟と思われるNRWTの子音で表記さ

れている人物を、ポリュビオスのいう「ナラウアス」(Narauas)であるとみなす説であると思われるが⁽²⁷⁾、これには異論もある。同名異人の可能性は当然考慮する必要があるし、またW. フスは「ナラウアス」の原音がむしろシャボアの『リビア語碑文集成』(RTL, 446)にみられる人名Nrbs(h)である可能性を示唆している⁽²⁸⁾。ポリュビオスはマシニッサに直接会って親しく話したことがあるのに(Polyb., IX, 25, 4-6)⁽²⁹⁾、ナラウアスに関する彼の記述の中にマシニッサとの関係が何ら触れられていないこともこの説にとってはやや否定的な材料であろう。

ナラウアスとマシニッサの系譜関係はさておき、ハミルカル=バルカの娘および孫娘との結婚が、ノマデス(ヌミダエ)の貴顕の人々をカルタゴに結びつける手段として、バルカ家とノマデス側の双方から自覚的に追求されたことを、ポリュビオスとリウィウスの記述からとりあえず確認することができる。

また、仮にナラウアスがマッシュリー王族(ないし貴族)に属しないとすれば、カルタゴ人であるバルカ家がノマデス(ヌミダエ)の二集団——ナラウアス一族とマッシュリー族——をつなぐと同時に競合の関係におく結果になっていることにも注目したい。マシニッサの世代に実現される「ヌミディアの統一」、つまりマッシュリー王家によるヌミダエ(ノマデス)全体への支配は、ヌミダエ(ノマデス)という集合が元来その範囲でまとまることを必然とするような民族的・種族的同一性を持っていたからというよりもむしろ、少なくとも「傭兵戦争」および第二次ポエニ戦争期以降、ハミルカル=バルカからの政略結婚策によって、カルタゴの貴婦人を妻とし母とする、その意味で「カルタゴ化」された(或いは「カルタゴ化」を志向して競争する)ヌミダエ(ノマデス)支配層が種族横断的に形成されたことを一つの条件として達成されたのだとも考えられる。実際、第二次ポエニ戦争期のヌミディア統一過程においては、マッシュリーと対抗関係にあったもう一つのヌミダエの種族マサエシュリー(Masaesylii)の王シュファクス(Syphax)がカルタゴ貴族ギスゴの子ハスドルバルの娘ソフォニスバ(Sophonisba)と結婚している。ローマと同盟したマシニッサはカルタゴ側についたシュファクスを破ってその領土と共に妻をも手に入れるが、大スキピオの説得によって、カルタゴとの絆を断つべくソフォニスバに毒杯を強いるのである⁽³⁰⁾。ナラウアスは史料上カルタゴの貴婦人と結婚した(ないし結婚を約束された)ことが確認される最初のノマデスであり、今述べたような意味での最初の「ヌミダ(ヌミディア人)」——マ

シニッサによって実現されることになるヌミディアという歴史的構造物の原型^{プロトタイプ}——であると言えよう。

3. ノマデスとは何か？

ナラウアスを「ヌミディア人」のモデルとするような見方は、古代ギリシア・ローマ人自身の間にも存在した可能性がある。リウィウスによって描かれるマシニッサのローマ人の前への初登場の場面が、その可能性を示唆する。リウィウスによれば、マシニッサは第二次ポエニ戦争中、ハンニバルがイタリアへ向った後のスペインにおいてカルタゴ軍のマグの下でヌミダエ騎兵隊の指揮者として活躍していたが⁽³¹⁾、ローマ軍の捕虜となった甥を大スキピオが送り返してくれた事件⁽³²⁾をきっかけにローマ軍と接触し始め、スキピオと直接会って手を握って誓約を固めることを望み(Liv., XXVIII, 35, 1)、口実をもうけてガダス島の島から大陸(スペイン本土)に渡り、そこで会見を果たす。マシニッサは少数の護衛と共に打ち合わせてあった場所に現われ(XXVIII, 35, 4)、かねてからスキピオへの賛美に満たされていたのが(XXVIII, 35, 5)、スキピオの優れた容姿を見て一層眩惑され(35, 5-8)、彼とローマ人民への奉仕を誓う(35, 9)。スキピオも、敵の全騎兵の中でマシニッサこそその頭(caput)であると知っていたので、会見を喜ぶ(35, 12)のである。この叙述とポリュビオスの描くナラウアスのハミルカル=バルカとの会見の場面は明らかに類似しており、リウィウスがポリュビオスを参照しつつマシニッサ・スキピオ会見の場を叙述した可能性は高いと思われる⁽³³⁾。注目すべきなのは、両者の類似が単に会見の場面そのものの描写の類似にとどまらず、会見を取り巻く状況、戦局全体の中での両会見の占める位置の類似性に及んでいることである。カルタゴ軍のヌミダエ騎兵隊の中核であり、カルタゴの後背地のマッシュリー人の王族でもあるマシニッサが大スキピオに忠誠を誓ったことは、この後、スキピオ率いるローマ軍がアフリカに進攻する上での大きな布石であり、ザマにおけるハンニバルの敗北の一大条件となる——少なくともリウィウスの叙述はそのように構成されている⁽³⁴⁾——のである。ナラウアスのハミルカルへの帰順をカルタゴによる傭兵・リビア軍鎮圧成功の要因の一つとして強調するポリュビオスの叙述と、マシニッサと第二次ポエニ戦争をめぐるリウィウスの叙述は見事な相似形をなしている。或いはポリュビオスの叙述を承ける形でリウィウスの叙述が成り立っている。つまり、リウィウスはポリュビオスのナラウアス

記述を意識しつつ、いかにしてカルタゴがハミルカルによって得られたノマデス(ヌミダエ)の協力を失うかという経緯を、ヌミダエ(マシニッサ)をローマ側へと転じさせた大スキピオの功績を際立たせつつ物語っていると考えられるのである。

以上から明らかのように、ギリシア人ポリュビオスとローマ人リウィウスは共に、ノマデスないしヌミダエをまず第一に優秀な騎兵集団として——その動向が勝敗の帰趨を決するような重要な軍事的要素として捉えている。ヌミダエ(ノマデス)が民族・種族名であることをアプリアに前提とする近現代の研究史の中では⁽³⁵⁾、「ヌミディア人」という種族がまず存在し、この種族が騎兵としても優秀であった、という順序で論じられがちであるが、ポリュビオス(および、それよりは少ない程度においてもかもしれないリウィウスも)の視座は、逆である。最初に彼がノマデスと呼ぶ軍事的に重要な騎兵集団が認識され、いわばその「後」にこの騎兵集団の供給源としての種族的集団が意識されるのである。

第二次ポエニ戦争におけるハンニバルのイタリア遠征への出立を叙述するにあたって、ポリュビオスはスペインに残留したハンニバルの弟ハスドルバルの部隊についてこう説明する。「彼(ハンニバル)は彼(ハスドルバル)に更に騎兵として、リビュ=フェニキア人とリビュエスを450名、レルゲタイを300名、マッシュリオイとマサイシュリオイとマッコイオイとマウルスィオイ——彼らはオケアノスの近くに住んでいるのだが——から成るノマデスを1800名(Νομάδων δὲ Μασυλιῶν καὶ Μασαισυλιῶν καὶ Μακκοῖων καὶ Μαυρουσίων τῶν παρὰ τὸν ὠκεανὸν χιλιούς ὀκτακοσίους),そして歩兵として11850名のリビュエス、300名のリグリア人、500名のバレアレス人、それに21頭の象をも与えた(Polyb., III, 33, 15-16)。ここでは「ノマデス」という語はリビュエスやレルゲタイと並んでいわば騎兵部隊の種類(それが同時に種族であるにしても)を示すように見え、この「ノマデス部隊」がどんな種族から成るのが、マッシュリオイ(マッシュリー)、マサイシュリオイ(マサエシュリー)、マッコイオイ、マウルスィオイと改めて言い直されているのである。他のギリシア・ラテン語史料で、ノマデス(ヌミダエ)とは別の、それと並び立つ北アフリカの大種族集団として現れるマウルスィオイ(ラテン語ではMauri、つまりマウレタニア人。「ムーア人」の語源とされる)が⁽³⁶⁾、ここではマッシュリー等と共に「ノマデス」に含められていることから⁽³⁷⁾、この箇所における「ノマデス」がヌミディア人という一種族をさす固有

名詞というよりは、より普通名詞的な——「遊牧部族」の訳の方がふさわしいかもしれないような——使い方をされていることを推定し得る。ポリュビオスの『歴史』の現存部分の中で、*Νομάδες* およびその形容詞形 *Νομαδικός* は筆者が見た限り、先に挙げた「傭兵戦争」とナラウアスに関わる箇所を除いて全部で17箇所あるが⁽³⁸⁾、そのほぼ全てが戦闘におけるノマデスの部隊としての活躍に関わるものである。うち6箇所では「ノマデスの騎兵」(*τῶν Νομαδικῶν ἰππέων*, III, 44, 3 他)と明記されており、他の箇所も大部分が前後関係から騎兵であるノマデスを意味することが明らかである。特にハンニバル軍中のノマデス騎兵に関する叙述の多さが目立つ。「ノマデス」の語が部隊というより種族・民族的な使われ方をしているとみなし得るのは、「傭兵戦争」の主体としてのノマデスの他には、先に挙げた I, 31, 2 のレグルスのアフリカ上陸の頃同時にカルタゴを攻撃したノマデスの例があるだけであるが、これらの箇所も強いて「ノマデス=ヌミディア人」と解さずに、単に「遊牧部族」ととっても充分意味が通じるように思われる⁽³⁹⁾。

以上の分析から、ポリュビオスの叙述における「ノマデス」とナラウアスについて次のような仮説を立てることが許されよう。

- (a)ポリュビオスにとっての「ノマデス」とは、第一にカルタゴ軍中の騎兵部隊の精華ともいべき集団であった。この集団を彼は「遊牧民」ないし「放浪者達」の意味のある *νομάδες* の語で呼んで、他の騎兵集団（例えばリビュエスの騎兵）から区別した。（従ってポリュビオスにおけるノマデスは、叙述の舞台となっている北アフリカの「遊牧民」を「非遊牧民」のアフリカ人=リビュエスから分けることを主眼とした概念であり^{(39)bis}、完全な固有名詞とは言えない。）
- (b)このような北アフリカ「遊牧部族」騎兵がいかんしてカルタゴのコントロール下に入ったのか、という問題は、「プラグマティック」な歴史（I, 1, 4: *πραγματεία*。因果の連鎖を詳らかにした体系的全体史の意⁽⁴⁰⁾）をめざしたポリュビオスにとっては重要な関心事であり、「傭兵戦争」期における「遊牧民（ノマス）」ナラウアスのハミルカル=バルカへの心服と帰順、その娘との結婚（の約束）の叙述は、この問題に対する彼自身の一つの解答であった。

更に、リウィウスを通して知られるローマ支配層のヌミダエ（ノマデス）観について言えば—

(c)ポリュビオスが注目した、カルタゴに懐柔され、その手足となっている「ノマデス」を、いかにしてカルタゴから切り離して「独立」させ、同時にローマの同盟者として確保するのがローマの関心事であり、その成功例がマッシュリー王マシニッサであった。ローマとマシニッサおよびその後継者達との同盟形成の過程で、ギリシア語 *Νομάδες* に対応するラテン語 *Numidae* という、より固有名詞性の明確な集団概念が生まれた。（これはおそらくローマ人の上記のような課題意識が反映された結果であった。しかし、これがローマの側からの一方的な命名なのか、マッシュリー王権側の主張や先住民社会の実態がある程度反映されたものなのかは、*Numidae* の語源如何という難問に関わる問題であり、更に検討を要する⁽⁴¹⁾。）

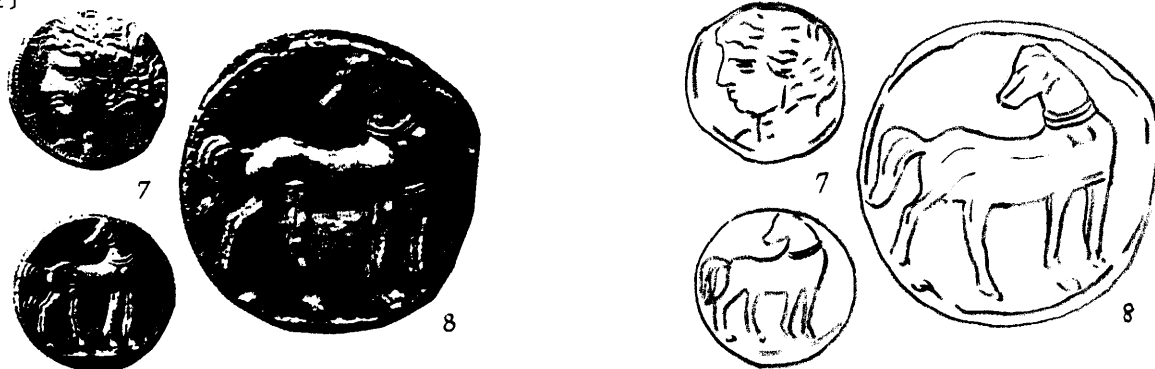
ポリュビオスの描くナラウアスに結実している勇猛果敢なノマス（ヌミダ）青年像は、第二次ポエニ戦争期のローマが勝利を得るために必ず手中におさめなければならない敵カルタゴの切札であり、それが現実となったものが大スキピオに帰順したマシニッサであった。その意味でナラウアスとマシニッサは、仮に実際の血縁関係はなくとも、ギリシア・ローマ人の考える同一の歴史上の系譜に属するのである。

4. カルタゴ貨幣にみられる「ノマデスの馬」

最後に、本稿の考察を補強してくれるかもしれない貨幣学上の知見を検討したい。H. R. バルドゥスは1981年の論文の中で、カルタゴの鑄貨の裏面にみられる馬の刻像について研究し、とりわけ前3世紀の半ば以降に出現する「首帯（Halsgurt）」付きの馬の像に注目する。すなわち前4—3世紀の標準的なカルタゴ貨幣には、馬具を何もつけない「野生馬（つまり裸馬）」——その意味についてはカルタゴの建国神話に関わるとも、海神ないし太陽神に関わるとも、或いは名馬の産地としてのアフリカのシンボルであるとも言われる——が刻されているのに対し、前3世紀半ばには首の所に二本のベルト状に表現された一種の首帯（バルドゥスのAbb. 7および8、図2参照）をつけ、頭をうしろに向けた馬を表わしたカルタゴ・シケル貨が現われ、更に前3世紀末には同じく首帯付きの大青銅貨、カルタゴ滅亡を前にした前2世紀の第1四半紀にも三種類の首帯付きの馬の貨幣がみられるという⁽⁴²⁾。

バルドゥスは貨幣の出土状況、他のカルタゴ貨幣との年代的、図像学的比較によって、ブッラ=レギア出

〔図2〕



H. R. Baldus, Naravas und seine Reiter, Tafel 1, Abb. 7 – 8 により作成した。7は貨幣の原寸大。

8は縦横2倍に拡大されている。

土の前3世紀半ばの最初の首帯つき馬のカルタゴ・シュケル貨が、まさに「傭兵戦争」の最後の年である前238/7年に出現した可能性が高いことを論証し⁽⁴³⁾、同時にL. ミュラーの研究等に依りつつ、この首帯は地理学者ストラボンが北アフリカの住民の騎乗法について述べている「木（木綿か鞣皮^{じんび}）か毛で造った首帯」であって⁽⁴⁴⁾、つまりこの馬は「ベルベル」馬——マウレタニア人やヌミディア人といった北アフリカ先住民の馬——を示すものと主張する。彼は更にこのような、小勒（Trense）や手綱（Zügel）の代わりに首帯という原初的な馬具をつけた馬が、M. ロストフツェフによって公表された前3世紀のヌミディア騎兵像（テラコッタ製）や、より新しくはトラヤヌス帝の記念円柱のマウレタニア騎兵像にも見られることを紹介しつつ、最後に、このような「ヌミディア馬（Numiderpferd）」がカルタゴ貨幣に登場した理由を、前238/7年にナラウアスがカルタゴ軍の援軍として果たした大きな役割に求める⁽⁴⁵⁾。「リビア人反乱」の鎮圧過程におけるカルタゴ軍中のナラウアスの二千の騎兵の活躍が、このカルタゴ・シュケル貨鑄造の背景にあるとみなすのである⁽⁴⁶⁾。

このバルドゥスの主張が正しいとすれば、この「首帯つき馬」に騎乗する習慣を持った人々こそが、本稿で明らかにしようとしたポリュビオスのいわゆる「ノマデス」の本来的定義に他ならないと言えよう。「ノマデス」とは、この簡単な「首帯」（むしろ首輪？）だけで犬のようによく飼ひ馴らした（Strab., 17, 3, 7）馬を操る、その点で他の騎兵隊と区別される「北アフリカ遊牧騎兵部隊」であった⁽⁴⁷⁾。カルタゴ貨幣への「首帯つき馬」の出現が前238/7年であることが確かだとすれば、ギリシア人ポリュビオスが叙述する「ノマス」ナラウアスの騎兵隊出現の画期性は、ポリュビオス以前に「傭兵戦争」期の同時代のカルタゴ人自身

によってまず第一に認識されたということになる⁽⁴⁸⁾。「ノマデス」とはこのように、カルタゴによるアフリカ支配が動揺し始めるポエニ戦争期、特に「ノマデス」自身の反乱がみられた「傭兵戦争」期にカルタゴ側とローマ（ポリュビオスを含む）側の双方によって、その存在を意識された新たな「軍事的＝種族的」資源であった。そしてナラウアスは、傭兵軍・リビア軍ではなくてカルタゴ軍に協力することによって「ノマデス」集団を（カルタゴ、ギリシア・ローマ双方の）支配層に認知させた、機を見るに敏な「ヌミディア人」の祖ということになるのである⁽⁴⁹⁾。

注

- (1) Polyb., I, 78, 1.
- (2) ポリュビオスはこの戦争を、カルタゴ人の「傭兵達とノマデスと反乱に参加したリビュエスに対する戦争（ὁ πρὸς τοὺς ξένους καὶ τοὺς Νομάδας καὶ τοὺς ἄμα τοῦτοις ἀποστάτας Λίβυας, Polyb., I, 65, 3）と呼ぶ。以下本稿では煩雑さを避けるために仮に「傭兵戦争」とするが、もちろんこの戦争の「リビア戦争」「ノマデス戦争」としての面を否定するものではない。詳しくは次章参照。ちなみにこの戦争に関する最近の研究書である Luigi Loreto, *La grande insurrezione libica contro Cartagine del 241-237 a. C.*, Roma, 1995, は題名のとおり「リビア大反乱」と呼んでいる。
- (3) Polyb., I, 67, 8. ここでは前241年の反乱直前のカルタゴ軍の構成に関して、イベリア人、バレアレス諸島人、多くの混血ギリシア人を挙げた上で、「しかし最大の割合を占めていたのはリビュエスであった」と述べている。前注のようにこの「リビュエス」は同じくアフリカの住民集団をさすと思われる「ノマデス」と併置される存在であるが（「狭義の」リビア人）、他方、地名としてのギリシア語 Λιβύη（リビア）はヨーロッパやアジアと並ぶアフリカ大陸をさす例が多くみられる。

- (4) Polyb., I, 70, 3. ここでは受けとるはずの給与(σπαρχία)の支払いの遅れをめぐるトラブルからこの「傭兵戦争」が起こる過程が叙述されている。
- (5) Polyb., I, 69-70.
- (6) Ibid., I, 78, 1.
- (7) Ibid., I, 78, 1-11; 82, 13; 84, 4; 86, 1.
- (8) S. Gsell, *Histoire ancienne de l'Afrique du Nord*, Paris, 8 vols (Réimpression de l'édition 1921-1928, Osnabrück, 1972, 以下Gsellと略記), III, pp.113; 119, n.1 (chef numide Naravas). Loreto, *La grande insurrezione*, p.154, n.28.
- (9) 注(2) および以下本稿参照。Loeb版の英訳ではポリュピオスの「ノマデス」をthe Numidiansと訳している。Polybius, *The Histories*, (with an English translation by W. R. Paton), London, 1922, rep., 1979, I, p.175 et al. また H. G. Liddell and R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, Oxford, 1968, の νομ-αδς の項も 3. としして 'pr. n. Numidian' とし, Polyb., I, 19, 3 (τῶν Νομάδων) を 出典としている (p.1178)。Gsell, V, p.105 参照。
- (10) Liv., XXI, 29, 1, et passim.
- (11) Gsell, V, p.106のようにこれが多数説であるが, 他方彼が同じ箇所 n.3 で説明しているとおり, ベルベリー地方(マグリブ)に「ノマデス」「ヌミダエ」に近い発音の自称を持った種族がいた可能性も複数の学者によって指摘されている。ローマ帝政期のアルジェリア東部のKhamissaにはgens Numidarumが居り, より西方にも別のgens Numidarumが居た, Gsell, V, p.106, n.5. 更にG. Camps, *Massinissa: ou les débuts de l'histoire, Libyca*, VIII, 1960 p.152, n.475 (bis) 参照。
- (12) リビア語に関しては例えば, 拙稿, 「ドゥッガとヌミディア王権」(東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学 第50集 平成11年2月), pp.117-124を参照。
- (13) Liv., *periochae*, 50 (Masinissa Numidiae rex); Sall., *Iug*, 5, 1 (Iugurtha rege Numidarum); 14, 1 (regni Numidiae).
- (14) 栗田伸子「ドゥッガとヌミディア王権」pp.121-122.
- (15) Camps, *Massinissa*, p.284, n.879に依る。
- (16) この点で本稿は Νομάδες, Numidiaeの語源に関する多数説〔注(11)〕の立場に近い。
- (17) もう一箇所, 「傭兵戦争」の終結を記した箇所ではポリュピオスはリビア戦争の名を採用している。Polyb., I, 88, 5 (ὁ μὲν οὖν Λιβυκὸς πόλεμος). I, 13, 3; III, 27, 7も同様。Cf. II, 1, 3.
- (18) この前に, I, 19, 2-3のハンノの軍中のノマデス騎兵に関する記事がある。
- (19) ただし通説では, カルタゴに従属していた「リビア人」と, 従属していなかった「ヌミディア人」を対比的に捉えることが多い。
- (20) Polyb., I, 77, 7.
- (21) ただしハミルカルが約束した娘(フロベールはこれをサランボオと名付けた)とナラウアスの結婚が実現したのかどうかについてはポリュピオスは何も述べていない。
- (22) Sall., *Iug*, 80, 6-7. ここではヌミディア王ユグルタの娘とマウレタニア王ボックス(或いは逆にユグルタとボックスの娘)の政略結婚に関して, 「しかしこのような絆はヌミディア人やマウレタニア人の間では軽く考えられている。なぜなら各人が資力の許す限りできるだけ多くの妻を持ち, 或いは十人, 他の者はより多く, 王達はもっと多く持つ。かくして心は大勢にふり向けられ, 一人も伴侶とはみなされず, 全員が等しく蔑まれる」と説明されている。
- (23) 佐藤育子「碑文史料にみられるカルタゴの政務職について」『史帥』33, 1992年, pp.35-38. ただしこれはカルタゴの奉納碑文における女性奉納者の出自に関してである。
- (24) Liv., XXIX, 29, 6-12. このガラ(ガイア)の系図についてはドゥッガのマシニッサ神殿のリビア・ポエニ二言語碑文からZilalsanの息子が王Gaia, Gaiaの息子がMassinissaという系譜が判明している。栗田, 「ドゥッガとヌミディア王権」p.121. 本稿の図1参照。
- (25) H. R. Baldus, Naravas und seine Reiter, *Deutscher Numismatikertag*, München, 1981, S.9; 18 Anm. 2.
- (26) J.-G. Février, *Cahiers de Byrsa* 7, 1957, 121, Z 2 (筆者未見)。
- (27) W. Huss, *Geschichte der Karthager*, München, 1985, S.260, Anm.65.
- (28) Ibid.
- (29) ここでの二人の話題はハンニバルについてであった。
- (30) Liv., XXIX, 23, 4; XXX, 12, 11; 21; XXX, 15, 4-8. またマシニッサ自身がシュファクスより前にソフォニスバと婚約していたとの記述も他の古典史料に見られる。Gsell, III, p.187, n.2.
- (31) Liv., XXVIII, 13, 6.
- (32) Liv., XXVII, 19, 9; XXVIII, 35, 8. この甥はMassivaと言いマシニッサの姉妹或いは兄弟の息子であった。
- (33) この箇所に限らずリウィウスはポリュピオスを多くの部分で参照しつつ執筆したと思われる。リウィウスの史料問題に関してはLoeb版のLivy, I (tr. by B. O. Foster), London, 1919, rep., 1988, xxviii-xxx. より詳しくは, H. Nissen, *Kritische Untersuchungen über die Quellen der vierten und fünften Dekade des Livius*, 1863, 等を参照。
- (34) 例えばザマの戦いにおけるマシニッサの活躍について, Liv., XXX, 33, 2; 13; 35, 1.
- (35) 注(9) 参照。
- (36) マウリーに関しては, Gsell, V, p.88 ff.
- (37) Gsell, V, p.107, n.5. ただしGsellはここでの「ノマデス」を固有名詞的に捉えている。Cf. Liv., XXI, 22, 3の平行記事。
- (38) Polyb., I, 19, 2-3 (カルタゴ軍中のノマデス騎兵); I, 31, 2 (ノマデスのカルタゴ攻撃); III, 33, 15 (前述のハスドルバル軍の構成); III, 44, 3 (ハンニバル軍中のノマデス騎兵); III, 45, 1 (同, ノマデスの偵察隊); III, 55, 8 (ハンニバル軍中のノマデス); III, 65, 6; 10-11 (ハンニバル軍中のノマデス騎兵), III, 68, 1 (同); III, 69, 6 (同); III, 72, 10 (同軍中のノマデス); III, 73,

- 3 (同) ; III, 116, 6-7 (カルタゴ軍中のノマデス) ; III, 116, 12 (同), 117, 12 (同) ; XI, 21, 1 (マシニッサ率いるノマデス) ; XV, 3, 5 (全アフリカ最強の騎兵を持つテュカイオスというノマデス) ; XV, 9, 8 (マシニッサ率いるノマデス)。
- (39) ポリュビオスはシュファクスに勝利して王となった後のマシニッサについては「リビュエスの王マシニッサ」(III, 5, 1) ; 「リビアにおけるマシニッサ」(XXI, 11, 7 ; XXXI, 21, 1) と述べ、「ノマデスの王」とは呼ばない。
- (39) bis もちろんポリュビオスの「ノマデス」の生活実態が真に遊牧生活であったかどうかは別の問題である。
- (40) Loeb版 Polybius, *The Histories*, xi.
- (41) ヌミディア王権の「ヌミダエ」観がサルスティウスの叙述の一部に反映されている可能性について拙稿, “The ‘libri Punici’, King Hiempsal and the Numidians,” *KODAI*, V, 1994で論じた。ポリュビオスの執筆の時点(前2世紀中葉)に既に Numidae 概念が(例えばスキピオ家において)存在したのかわからない。
- (42) Baldus, *Naravas und seine Reiter*, S.10.
- (43) *Ibid.*, S.11-12.
- (44) Strab., 17, 3, 7 (περιτραχήλα δὲ ξόλινα ἢ τρίχλινα). 飯尾都人氏の訳(ストラボン『ギリシア・ローマ世界地誌』II, 龍溪書舎, 1994年, p.616) 参照。ちなみにここでストラボンは、マウルスイオイ、マサイシュリオイおよびリビュエス(アフリカ人)一般に共通する服装・習慣について述べている。
- (45) Baldus, S.14.
- (46) 前3世紀末と前2世紀の初めにも首帯付きの馬の貨幣が現われることについてバルドゥスは前者をハンニバル軍中のヌミディア騎兵の活躍の反映であるとしつつも、後者(つまりマシニッサがローマと同盟した後)の説明については様々な可能性を挙げている。Baldus, S.15.
- (47) カルタゴ人自身の騎兵は手綱や小勒を備えた標準的な馬具を使用していたという。Baldus, S.13.
- (48) ポエニ語史料に「ノマデス」に相当する語があるかどうかは問題となるが、この点は今後の課題としたい。
- (49) バルドゥスも述べるように(S.13), ヌミディア王族の墓と思われるドゥッガの塔型墓(いわゆるアテバンの墓)にも騎馬像および四頭立て戦車のレリーフがみられる(栗田, 「ドゥッガとヌミディア王権」 pp.119-120)が、損傷が激しく馬具の様子はわからない。しかしヌミディアの王家の人物が騎馬像を自らの墓を飾るモチーフとして選んだことには意味があると思われる。

